



夏の思い出応援しました

現在、「秦野市公共施設の利用者負担の適正化に関する方針」に基づき、全庁的に公共施設の使用料を見直していることは、既にお知らせしたとおりです。この夏、この方針に定めた事項の中で、「子どもの共用利用無料化」など、事前に影響や課題を把握しておくべきものについては、「夏の思い出応援します！」と銘打って、試行的に実証実験を行いましたので、その結果のご報告と一つの問題提起をしたいと思います。

ネガティブとポジティブ

まず、どのような実験を行ったのかを紹介します。

I 中学生以下の個人利用を無料化

- ① 中央運動公園プール（7/1～9/6）
- ② 総合体育館（7/1～8/31）
- ③ おおね公園温水プール（9/1～9/30）
- ④ 公民館卓球台（7/1～8/31）

II 施設の新規開放

くずはの家研修室、図書館視聴覚室、桜土手古墳展示館映像室を有料で開放（7/1～9/30）

以上のような実験を行いましたが、このうち、昨年度との比較ができる施設の結果は、次のとおりでした。

施設名	実験結果
中央運動公園プール	小人利用者 8%増（大人5%増・未就学児13%増） 使用料収入 76万円（16%）減
総合体育館	小人利用者 119%増（大人4%減） 使用料収入 7万円（14%）減
おおね公園温水プール	小人利用者 57%増（大人変化なし・高齢者3%減） 使用料収入 20万円（11%）減

今年の夏は、例年以上に多くの子どもたちが公共施設で汗を流し、夏休みを楽しんでもらうことができました。また、管理運営上の大きな問題もなく、来年度以降の本格実施に向けて無料化の効果を実証することができました。

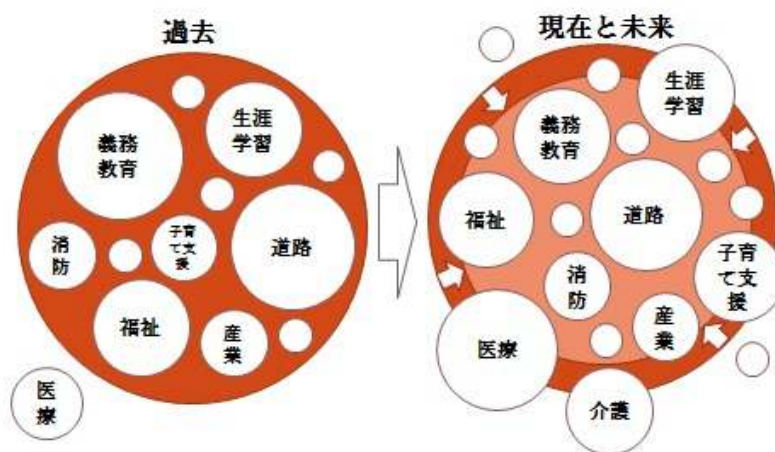
そして、中央運動公園プールでは、次のような現象が起きました。

市外の大人の利用が16%、市外の小中学生の利用が36%も増えました。

この結果を聞いて、職員の皆さんは、どう思いましたか？

「秦野市民の税金を使っているのに…」と思う方、「子育てにやさしい秦野市というイメージが広がって…」と思う方、さて、これを読んでいるあなたはどちらのタイプの職員ですか。異論もあると思いますが、前者は「ネガティブ思考」、後者は「ポジティブ思考」ではないでしょうか。公共施設の管理運営には、使用が無料か否かに関わらず、その街の住民が支払った多くの税金が充てられています。伊勢原市の子ども科学館、平塚市の美術館、博物館など、多くの秦野市民が利用しています。また、本市に温水プールができる前、二宮町の温水プールには、多くの市民が訪れていました。

前号でも触れましたが、富の分配よりも負担を分かち合う方法を考えなければならぬ時代です。広域的な公共施設の利用は、負担を分かち合う方法の一つになるとともに¹、その街のイメージ向上にも役立ちます。「うちの街にはこういう施設がない」と、自治体は競うように公共施設を作り、今日のフルセット主義を生み出しました。これは、富の分配ができる時代だからこそ成り立ちましたが、これからは、「〇〇の施設がない」ということをネガティブにとらえ、それを造ろうとするのではなく、「隣町の施設を使わせてもらえばいいではないか。それよりも、他市より△△の充実を」というポジティブな発想への転換も必要です。



左の図は、使用料見直しの必要性を説明するために作成しました。赤丸は税金の役割の範囲、右側の薄い赤丸は人口減少により税収減となることを表し、税金の使われ方が過去と現在・未来では大きく異なることをイメージ化しています。

こうした状況の中では、「～の恐れがあるから」、「～が心配だから」というネガティブ思考で現在の姿を守ろうとしていけば、公共施設が持つ大切な役割を残していくことはできません。「～の恐れがあるけど、～すれば」、「～が心配だけど、～したらどうだろうか」というポジティブ思考に切り替えることができれば、きっと多くの公共施設の役割を将来の市民にも届けることができるはずです。

10月30日(金)午後3時から本庁舎3階講堂で開催する「次世代育成アカデミーオープン講座」において、横浜市共創推進課担当係長の河村昌美氏の講演があります。横浜市のネーミングライツや広告収入に関する事業の中心となった方ですが、氏が持つ問題解決能力や突破力は、これからの地方公務員には必ず必要となるものです。興味のある方は、ぜひ聴講してください。(申し込みは人事課へ)



¹ 現在スポーツ施設では、相互に住民料金で利用できる協定を近隣市町との間に結び、広域的利用を図っています。